

師走です。その1

徒然草第74段

[要約] 一生は短く、万物は常に流転している

原文

蟻のごとくに集りて、東西に急ぎ、南北に走(わし)る。

高きあり、賤しきあり。老いたるあり、若きあり。行く所あり帰る家あり。夕に寝(い)ねて、朝に起く。

営む所何事ぞや。

生をむさぼり利を求めてやむ時なし。

身を養ひて何事をか待つ、期(ご)するところ、ただ老(おい)と死とにあり。その来る事速かにして、念々の間に留まらず。これを待つ間、何の楽しみかあらむ。

惑へるものはこれを恐れず。

名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。愚かなる人は、またこれをかなしぶ。

常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり。

現代語訳

人間がこの都に集まって、蟻のように東西南北にあくせく走り回っている。

その中には地位の高い人や低い人、年老いた人や若い人が混じっている。それぞれ働きに行く所があり、帰る家がある。帰れば、夜寝て、朝起きて、また仕事に出る。このようにあくせくと働いていったい何が目的なのか。要するに自分の生命に執着し、利益を追い求めてとどまる事が無いのだ。

このように、利己と保身に明け暮れて何を期待しようというのか。何も期待できやしない。待ち受けているのは、ただ老いと死の二つだけである。

これらは、一瞬もとまらぬ速さでやってくる。それを待つ間、人生に何の楽しみがあろうか。何もありません。生きることを知ろうとしない者は、老いも死も恐れられない。

名声や利益に心奪われ、我が人生の執着が間近に迫っていることを、知ろうとしないからである。逆に生きる意味がわからない者は、老いと死が迫り来ることを悲しみ恐れる。

それは、この世が永久不変であると思ひ込んで、万物が流転変化するという無常の原理をわきまえないからである。

あくせくすることなく、急がずに悠々と師走の時を楽しみましょう。

「生をむさぼり利を求めてやむ時なし。」というような姿ではなく、「常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり。」という理を修めて、走らずに、一步一步進むのが良いようです。

